

説教 『汚い足が洗われている』山本 護 牧師  
聖書 エレミヤ書 2：20～22／ヨハネによる福音書 13：1～11

受難節、「裏切り」という不条理な役を果たすユダは使徒の中で唯一イエスと同じユダ族、ダビデの部族に属していた。つまり裏切りは、周縁ではなく中心部で起こる。「既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた(ヨハネ 13:2)」。親密な手管(ルカ 22:3,48)を使う悪魔のこと、「そんな危ないことはやめて、もっと穏当にやればいいじゃないか」と誘惑したか。イエスが弟子たちを「このうえなく愛し抜かれ(ヨハネ 13:1)」、己が命運を引き受けているにもかかわらず。

弟子たち全員の足をイエスが洗う印象的な場面はヨハネ福音書だけにある。悪魔がユダに働いたのが夕食時で(13:2)、この直後にイエスは席を立って弟子の足を洗い始めた(13:4～5)。悪魔に憑かれたユダの足も洗った。ペトロが「足など洗わないでください」と言うと、イエスは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる(13:8)」と答えた。するとペトロはその意味が分からないまま「主よ、足だけでなく、手も頭も(13:9)」と調子づいたことを言う。逮捕が間近に迫る雰囲気の中での、とぼけたようなこの無理解がイエスの不穏な言葉を導く。

「既に体を洗った者は、前身清いだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない(13:9)」。ユダだけは「清くない」ということか。一応はそうだろう(13:11)。だがここが出発点だ。清い者の「汚い足」を考えよう。「あなたがたはキリストの体であり、また一人一人はその部分(1コリント 12:27)」。こんな身体(教会)の、汚い足をユダが負った。清い使徒でも足は汚く(ヨハネ 13:10)、イエスに洗ってもらう必要がある。すなわちユダとはそのまま、清い私たちの「汚い足」なのだ。だから「わたしの足など、決して洗わないでください(13:8)」など躊躇している場合ではない。

主であり師である者(13:14)が弟子の足を洗うことは異様な光景。「わたしのしていることは、今あなたに分かるまいが、後で、分かることになる(13:7)」。ユダはどんな思いで足を洗ってもらったか。使徒は無理解のまま、イエスの突飛なふるまいに不思議な喜びを感じた(13:9)。しかしユダは「自分の才覚で危険な状況から脱しなければ」と画策し始めていた(13:2)。少しの後、イエスが葡萄酒に浸したパン切れ(聖餐を暗示)をユダに与えると、サタンが中に入った(13:27)。そしてイエスは「しようとしていることを、今すぐ、しなさい(13:27)」と命じた。ユダにしてみれば、自分が考えている「危険を回避する穏当な計画」をイエスが許可した、と勘違いしたのかもしれない。

私たちは恐縮してキリストに言うだろう。「わたしの足など、決して洗わないでください(13:8)」と。だがキリストは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる(13:8)」と私たちの汚れた足を洗ってくださる。この決定的な救いの事実を覚えておいてほしい。「救いの御手が今ここにある」だけでは不安で、ユダのように自分の力でじたばたすることがあるかもしれない。そんな時こそ省みてほしい。私たちの足はキリストによって洗われ、汚れが清くされていることを。それゆえ、キリストと深く結びつき、何をもってしても引き離せない、ということ。



#### 【おまけのひとこと】

足を洗う 日々 耕すほどに 蒔くほどに 足は汚れていく だから一日の終りに 念入りに洗う  
一つ一つ土塊を落とし 一つ一つ恵みを思い起こす ああ今日もまた 足を洗って下さっている